

萬松禪寺略緣起



萬松寺略縁起

一、山 号

小野山と号する。

二、宗 派

臨済宗建長寺派に属し、東京都立川市柴崎町四の普濟寺

の末寺である。

三、開 基

覚翁等公といわれ仙術を身につけた奇特の老翁である。

四、開 創

ご開山様は勅諡ちし圓光大照禪師滅宗宗興大和尚で、いまからおよそ六百五十年前、元徳二年（一二三〇）に創建された禪寺である。ご開山様が若くして相州鎌倉建長寺に入り、修業成ったのち関東を遊歴して建立されたといわれ

ている八禅刹のなかの一寺が当山である。

ご開山様は、古く（愛知県一ノ宮市萩原町中島）にあつた中島城主の中島藏人の子息にして、その父中島藏人は人皇五十二代嵯峨天皇の第十二皇子河原院（源融）の後胤にあたる。

ご開山様は、みずから創建された愛知県一ノ宮市大和町にある妙興寺において永徳二年（一三八二）七月十一日示寂された。世寿七十三。広く衆庶を教化し、社会事業にも尽力された高僧であり、示寂後四十余年を経て應永三十三年（一四二六）第一百一代稱光天皇より「圓光大照禪師」の諡号を賜わっている。

五、本尊

薬師如来。脇侍に日光、月光両菩薩、十二神将を祀る。

六、石仏群

参道に建つ石塔、石仏群およそ三十基のうち江戸末期の造立といわれる灯笼型六地藏尊一基は珍しい型の石仏で、なかでももつとも大きい。高さ二米、円頂立姿で胴は四角、全体は六面型をなしている。

七、銘木

八百余坪ほどある境内には樟、檜、藁、松などの常緑樹、欒、桜、楓、柿、梅などの落葉樹が多い。本堂前には樹齢およそ三百五十年を経る榎の老樹があり、町田市指定の銘木となっている。

八、由縁略記

徳川期の慶安二年（一六四八）八世喜叟悦和尚の代に三代將軍家光公より御朱印七石を賜わる。いまはその写と

御朱印箱とが伝存する。

- 寛文年間（一六六一〜七二二）十一世祥翁喜和尚の代に火災により焼亡している。

- ついで寛政二年（一七九〇）に作られた「万松寺古図」には境内総坪数三千六百坪、本堂四十五坪、庫裡六十坪とあり、付属建物や弁天宮、稲荷社の間取りについても記されている。

- 明治四年（一八七二）本堂を「小野郷学校」の教場に開放して郷土の青壮年の子弟教育に努めている。

- 大正十二年（一九二三）関東大震災に鐘楼および土蔵一棟が倒壊している。

- 昭和十九年（一九四四）八月、東京都品川区鈴ヶ森国民学校の職員児童寮母ら六十名ほど本堂に集団疎開する。

- 昭和二十年（一九四五）五月、太平洋戦争のため、焼夷弾の直撃を受け本堂庫裡玄関物置などすべて焼亡する。山門、土蔵一棟のみ延焼を免かれる。

過去帳、古文書、仏典、仏具莊嚴品および什物その他書庫にあった書籍類およそ一千余冊が灰燼に帰している。当夜、疎開中の職員学童ら全員無事に隣寺へ避難する。同年九月、昌道和尚、仮庫裡を建立。ついで昭和二十四年および二十九年に昌道和尚が仮本堂および仮客殿を建立している。

- 昭和三十八年（一九六二）現住持が庫裡を再建する。
- 昭和五十四年（一九七九年）老朽化の甚だしくなった仮本堂および仮客殿を解体、その跡に新たに本堂および客殿建立工事に着手、昭和五十六年八月いづれも竣工する。
- 昭和五十七年境内の造園整備工事完了し、同年十一月、ご開山様の六百遠年諱並びに本堂客殿の落慶法要を厳修して今日に至る。

付録

(一) 萬松寺と小町井戸伝説

今を去ること一千二百年、奈良朝の昔、当寺の西方にあたる城山の峯に靈水を湧出させて居を構える一仙人が住んでいた。名は覺翁等公とか呼ばれて仙術を身につけている老翁であった。この仙人は里に住む人たちにむかって常に「この靈水は諸病を癒す薬王水なり。癩病諸瘡眼耳の病患は、この水を呑み、かつ洗わば病苦ことごとく除かれん。」と言っていた。はじめ里人たちは、この奇特の老翁を恐れて近寄ることもせずにはいたが、この水の効能をたびたび聞かされるにおよんで、この仙人に親しみを覚え、い

つしかこの水を服用したり、洗眼などに用いたりして、その効験あらたかなことに不思議さを感じ、仙人の掘り当てた水であるので、この水を仙水と呼ぶようになっていた。

里人たちが、この仙水の効能を近隣の病者にも語り伝えたために、近在の病者がわれもわれもと、この城山の峯に來り、教えられた通りにこの霊水を呑み、かつ洗ったところ、病苦はことごとく除かれた。そこで里人や近在の者らは「いよいよ不可思議なる霊水かな、奇なる仙水かな」と思い込むようになったが、いつしか年も経ち、この仙人の姿も見えなくなり、その跡には薬師如来の尊像のみが残されていた。これを知った里人たちは力をあわせてお堂を建て、その中にこの如来尊像を安置し奉った。

人皇五十代桓武天皇延暦九年（七九〇）蝦夷が攻め來って、この城山を奪取して里人を苦しめた。折りしも征討の命を受けていた坂上田村麻呂は延暦二十年（八〇一）この蝦夷を武蔵野まで追い払って、この地を取りかえた。そして將軍田村麻呂は、この地に御前を留めて、奥州におもむいて蝦夷を征伐したのち、ふたたびこの地に立ち寄られた。將軍および御前は薬師如来を深く信仰なされていたので、將軍は平等上人をここに住まわせて東方鎮護のご祈禱を命ぜられた。

時は移り、平安の世に入るや、美貌の才女小野小町が悪病に罹り、朝廷を退いて京近くの社寺に詣でてご祈禱しても、病苦少しも癒えず悩みぬいていた折、いずこより伝え聞きしか、小町は、この城山にある霊仏と仙水の効あることを知り、はるばると京より東国はこの地に下り、この城山のお堂に三七日間参籠されたが、病苦が少しも癒えぬため、夜明けを待って

この峯を立ち去ろうと考え、薬師如来に暇乞いをしようとして

南無薬師諸病悉除の願たて身より仏の名こそ惜しけれ

と詠まれて、少しまどろまれたとき、薬師如来が夢にあらわれ給いて

しぐれの雨ただひとときのものぞかし小町が蓑笠そこに脱ぎおけ

とお詠みなされた。

やがて小町が夢より醒めて、わが身を見なさると、悪瘡は少しく癒えはじめていた。そこで小町は、いよいよ信心を固くして誓願を立てて、千日の間この山に参籠されたために、悪瘡はことごとく平癒してしまったといわれている。

その後この山麓は山賊の棲むところとなり、小野小町村と呼ばれていたが、のちにいつしか小野路村と呼び改められてしまった。

かくて人皇八十二代後鳥羽院建久三年（一一九二）征夷大將軍源頼朝公が奥州征伐にむかう途次、この城山の霊地なること、仙水の徳あることを聞かれ給い、この峰に城を築き工藤左衛門祐経にその支配を命じ、お堂を外山に移された。

しかも頼朝公は奥州よりの帰路、この堂の薬師如来を霊仏として鎌倉に持ち帰り、仙水寺を建て深く信仰なされたが、やがてこの城山の城も滅び鎌倉の仙水寺も廃れて、そこには薬師如来像のみが残されていた。

人皇九十五代後醍醐天皇元徳二年（一三三〇）鎌倉建長寺において修業の成った大應国師の弟子、滅宗宗興和尚が関東遊歴の折、この地に来り、寺を再建して仙水寺に残されていた薬師如来の尊像をふたたび取りもどして安置し奉り、寺をば東光山萬松寺と名づけた。

(註一) 江戸期の寛政年間ごろまでは、当寺の古文書によると「東光山」の山号が用いられていたらしい。その後当寺はこの村を開いた寺であるゆえに「小野山」と山号を改めている。

(註二) 伝えられる仙水の湧水は、いま城山の峰にある。百日のひでりにも涸れることがない。土地の人は俗にこの湧き水を「小町井戸」と呼んでいる。いまから三十年ほど前までは、農夫らが渴をいやすために飲んだり、野菜を洗ったりしていた池である。いまでは周囲が崩れて浅くなり、僅かな水量しか湛えていないが、往古はこの池から流出する水が小さな瀧となつて、下方の竹林へ落下していたといわれている。

(二) 小野路城址と天王さま祭り

「小町井戸」のある山林を路ひとつ隔てたところに小野路城址がある。小高い丘をなす山林の中にあつて松樹、雑木が茂りあつている。二つの山林は、古くから当寺の所有地であつたが、たまたま昭和五十四年にこの地域一帯が東京都より「凶師・小野路歴史環境保全地域」に指定されたために、これらの寺有山林は買い上げられて東京都の管轄地となつている。

この小野路城址は標高一四一米ある。楕円状をなしており、中世の砦の趾といわれている。東西一一五米、南北六七米、周囲三三〇米ほどある。山上には本丸跡があり、遺濠をめぐらしている。いまは、ここに小祠が建っている。牛頭天王および武州御岳山の神霊を祀つてある。境内および参

道は寺有地として残っている。毎年七月十五日には「天王さま」と呼ばれる祭典がこの祠の前でおこなわれる。万松寺の住持が誦経をし、祝詞を奏上して、この地域住民の平和と身宮安泰の祈禱をする。終って境内に小宴を開く民俗的な風習が残っている。

○参考

- 一、新編武蔵風土記稿
- 二、武州多摩郡小野路村小野山萬松寺略縁起
(寛延元年、当山十五世天外碩源和尚筆録)
- 三、萬松寺古図(小野路町小島資料館所蔵)
- 四、町田市史 上巻
- 五、町田市史史料集(第二・六集)

昭和五十八年十二月吉日 印刷・製本

東京都町田市小野路町三四番地

臨濟宗建長寺派 小野山萬松寺

現住持 敬嚴記